

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	子ども支援室 えがお		
○保護者評価実施期間	2026年 2月 1日		2026年 2月 20日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	10人	(回答者数) 9人
○従業者評価実施期間	2025年 12月 1日		2025年 12月 24日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	8人	(回答者数) 8人
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 15日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	発達支援室が1階、2階と使えるためニーズに合わせて使える	その日の利用児童の状況や発達、年齢等を考慮しグループに分かれて活動をしている。特に静かに学習宿題に取り組める児童と、職員の支援度が高く離席、発声等有る場合には環境的に刺激が少なくなるようにしている。	継続し、利用児童の特性、支援課題など状況に合わせて環境を整備していく。
2	駅の近くのため、周辺の施設、公共の乗物が使える。	買い物体験や公共の乗物を使って出かけ、社会のルールを学ぶ経験を増やす。	高校生等必要に応じて自力で通所する経験を取り入れて就労につなげていく。
3	少人数集団のため、職員配置が充実し、個々の特性に合わせて、活動に取り組み、個別対応場面でも職員配置に問題なく、安心して行える。	利用児童の年齢、特性にあわせそれぞれの年齢、課題が充実していけるように、課題の細分化、就労に向けての取り組み 集団での取り組みを行いながら、他児童を手伝う、認めるなどの対人課題に取り組む	継続して行っているしながら、児童自身が学年が上になっている自覚を持てるようにする。手伝ってもらってから手伝ってあげる立場へ

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	小学生から継続利用児にとって変わらない生活が長くなる。	活動内容の立案をマンネリ化しないように設定する。 児童、職員がなれ合いにならない甘えが出ないように担当を固定化しないようにする	活動ごとに振り返りを行い、内容を充実していく。児童自身ができるようになっていくことを職員と振り返り、自分の目標を決まるなどしていく。
2	女性職員体制なので、同性介助ができない。	排泄介助や同性介助が求められる特性度が強い方の利用は説明しお断りをすることがある。 思春期の児童への必要な性に関するルールなど取り組みにくい。	保護者、ご本人への説明を行い取り組む。 保護者と課題を共有し、ご家庭での対応をお願いします。
3			